

資料 人体の美しさと美術史の関連

1 古代ギリシャの理想美

古代ギリシャはヨーロッパ文化の根底にある文化の一つである。ギリシャではオリュンポスの神々が信仰され、キリスト教やイスラム教徒異なる多神教であった。そのため、男神、女神以外にも異形の神など多様な神像がつけられた。

当時裸体の彫刻が多くつけられ、多くは神に捧げられるものとして制作された。

美は「中庸」「調和」「均整」に結びついていた。

2 中世の美術

中世は非常に長く一概にはいえない部分も多いが、初期キリスト教時代からゴシックまで「神」が中心の時代であり、聖書の教えを表現するものが多く、美術作品も「人間」の美しさそのものを表現するものではなく、記号的なものが多くあった。

3 ルネサンスの美術

古代ローマやギリシャの文化が再発見された。

技法的には、遠近法の定着や・油彩技法の開発など大きな変化があり、思想的には新プラトン主義の影響が考えられる。

プラトン（紀元前400年前後）は「自然はアイデアの模倣、芸術は自然の模倣」と捉えた。ルネサンスの思想家は古代の叡智を広めて近代的な形にすること、整合性のある理解しやすい象徴体系を作ること、さらにそれをキリスト教の象徴的意味と調和させようとした。

この時代多くの肖像画も制作され、特に権力者の肖像画は美しさよりも、自らの権力の誇示が表現されている。

4 マニエリスム

古典的な美のモデルを模倣しつつ、美を比例に還元する教義を批判し、流れるような動き、ねじれた空間を表現した。

5 バロック

美は諸部分の比例にあるという原則はルネサンス期に完成された、しかし、同時期に不安で人を驚かすような美を表現しようとする動きもあった。中世からヨーロッパ世界では「メメント・モリ（ラテン語で『死を思う』）」や『ヴァニタス（空虚）』など死をモチーフにしたテーマが描かれ、バロックではドクロ以外にも時計や蝋燭、砂時計、パイプ、人生のはかなさを意味する花、果物、シャボン玉、刹那を意味する楽器などで表現された。

6 新古典主義以降

18世紀後半に流行した考古学ブームが古代への憧れを募らせた。古典研究が真の古代ギリシャ・ローマを求めようになった。